令和7年度 嶺北特別支援学校 学校評価書

項目	具体的取組	成果と課題	改善策・向上策
１ 学校業務改善のための取組 ＤＸ委員会 (情報管理部)	新校務支援システムの活用、連絡アプリを使った遅刻、欠席連絡やお便り等の配信、Webフォームを利用したアンケート調査、オンライン会議ツールを活用した研修やオンラインミーティングなど、学校全体としてICT機器を活用した業務改善を図る。	連絡アプリでお便り等の配信を行うことで、印刷・配付業務の削減につなげることができた。Webフォームを利用したアンケート調査に教職員、保護者共に慣れてきたが、未回答者に再度声かけをする必要があり、手間が生じている。校務支援システムが、特別支援学校用にカスタマイズが難しく、施設・設備予約、行事予定の利用のみに留まっている。出席簿や保健関係書類などにも活用していけるとよい。	連絡アプリを使った遅刻、欠席連絡は継続して取り組んでいく。配付されたsurface端末を活用し、オンライン会議ツールを使って職員室で会議を実施できるように進めていく。会議の度に資料を印刷したり、ダウンロードしたりせずに直接データを閲覧するようにすることで、よりペーパーレスを推進していきたい。資料を会議前に共有し、意見等を事前に求めることで、会議時間の短縮につなげていきたい。
２ 人権教育の推進 （図書研究部）	人権感覚チェックシートで自身の取組を振り返り、人権感覚を磨く。	今年度初めて、人権感覚チェックシートを作成し、学期ごとに振り返りを行う取組を行った。また、校内研修で資料を基に人権について考える機会を設けたことで、取組指標、成果指標ともに、A+Bの合計が90％以上を達成することができた。しかし、取組目標で5名、成果目標で1名「あまりできなかった」の回答があった。	目標は達成されたが、人権に配慮した指導・支援の徹底は、継続して行っていかなければならないことであるため、次年度も校内研修と合わせて、チェックシートによる振り返りを継続して行っていく。今年度中に、チェックシートの見直しを行い、より本校の実態に合ったものにしていく。
３ 教育課程 学習支援 （小学部 低学年）	自ら行動したり、自己表現したりする態度を養うために、日々の生活の中で安心できる環境設定や関わりに努め、教員間で振り返りながら個の発達段階やニーズに応じた適切な支援について検討する。	遊びの指導については、学部研究で動画を振り返りながら対象児のねらいをもとに授業改善を行った。その後自分たちのクラスでも同じような振り返りを行い授業に反映した。その他の場面でも教員の振り返りを行い支援について検討した。教職員の取組指標、成果指標ともにA+Bの合計が100％になり目標を達成できたが、成果指数に関してはAが58％となっている。保護者については高い評価（満足度95％）を得た。	話し合いについては来年度も継続して行っていく。教員間で振り返りをするためにどのような取組を行っているかなどの情報を共有し、話し合いの充実を図る。クラス内だけでなく学部内で児童や支援についての共通理解が持てるような時間を定期的に設ける。また日頃から他クラスの児童とも関わる機会を持ち、学部全体で児童をみる意識を持つようにしていきたい。
４ 教育課程 学習支援 （小学部 高学年）	児童が体力を向上していけるように、年間を通して学年やクラス活動、個別の指導に体を使った活動を取り入れる。児童が自発的に体を動かそうとする意欲を高められるように、集団の場で賞賛し、個に応じた指導の工夫をする。	「体力作り」２年目の取組みで、教職員の取組指標、成果指標ともにA+Bの合計が100％となり、目標を十分に達成することができた。集団の場で賞賛することや個に応じた指導の工夫をするという取組によって教員の意識が高まり、自立活動や遊びの指導の時間に体を使った内容を多く取り入れていた。児童の様子を通信等で発信したことで保護者からは高い評価（満足度100％）を得た。	児童が自発的に体を動かそうとするには、楽しい活動であること、繰り返し行って見通しがもてる活動であること、児童自身が目標をもって行う活動であることが大切である。各クラスや個の実態に応じて取組を工夫をして、児童が楽しく自発的に体を動かす場面がさらに多く見られるようにしたい。クラスや個別でどのような取組を行っているかを情報共有していけるとよい。
５ 教育課程 学習支援 （中学部）	生徒一人一人の課題について学部全体で共有した上で、協働的な学びの実現を目指したペアやグループ活動を取り入れる。	学部会等で生徒の情報を共有し、ペアやグループ活動を通しての成長を目指した。教職員は取組指数・成果指数ともにA+Bの合計が90％を超え、目標を達成することができた。ただAの割合だけ見ると、取組指数が35％と全体の1/3を超えているのに対し、成果指数は3割を切った。保護者の満足度指数はA+Bの合計が90％を切り、目標を達成できなかった。	教職員は取組指数・成果指数ともにAの割合が更に増えるように取り組んでいく。生徒の課題や活動内容によって、グループの大きさやメンバーを臨機応変に変えて対応する。また、毎日の連絡帳や保護者懇談、授業や行事の参観、学部だよりなどを通して、保護者に生徒が友達と協力して活動している様子を発信していきたい。
６ 教育課程 学習支援 （高等部）	卒業後の生活を見据え、社会参加への関心と意欲を高めるために、現場実習を柱として、地域と連携し、個々の力を伸ばす学習活動（校外での体験・協働、外部講師の招聘等）を推進する。	積極的に校外で活動できる機会や地域の方と交流する機会を増やし、出前講座や外部講師を招聘しての授業を行った。現場実習を中心に様々な学習活動におけるアセスメントを大切に、個々の活動設定や支援を丁寧に進めたことで、保護者は基本的な生活習慣面、コミュニケーション面、作業スキル面、意欲・態度面、それぞれでの成長を感じていた。特に作業スキル面での成長を感じた割合が多かった。	現場実習を柱として、外部講師の意見など、第三者からの客観的な評価を大切に、ＰＤＣＡサイクルを進め、生徒によりよい学習内容を提供していく。実態や適性の把握を丁寧に進め、生徒と保護者とのコミュニケーションを大事にしていきたい。日々の活動はもちろん、生徒が社会を知り、触れ合える機会を多く企画していくことで、基本的な生活習慣面、コミュニケーション面、作業スキル面、意欲・態度面の向上につなげたい。
７ 自立支援 (舎務部)	保護者や学校との連携を密にし、寄宿舎生一人一人の実態や目標、支援方法を共有する。また、寄宿舎生が生活の中で、成功体験を積み重ねることができる場面を設定し、自立につなげる。	保護者、担任との連携を密にして、個に応じた目標や支援方法を共有したこと、また寄宿舎生活において成功体験を積み重ねるよう働きかけを実践し子どもの変化を保護者に伝えるように努力したことで自立に向けた成長に確かな成果が得られ、保護者からも高い評価を得られた。（満足度98.7％）	寄宿舎生の人数が増えて、生活面や精神面で個別の配慮が必要な子どもも増えてきている。今後も子どもの実態やニーズを的確に把握して職員で共有する。保護者との連携を強く意識し、成功体験が得られる効果的な働きかけや支援を工夫する。また、子どもの成長の様子を保護者に通信や行事等を通して具体的に伝える工夫をし、機会を増やすよう努めたい。
８ 健康・安全 (保健部)	マニュアルの見通しを進めながら、避難訓練や救命救急研修に取り組んだり、熱中症や感染症予防に努めたりして、児童生徒の安全を考えた支援につなげる。	アクションカードの更新や休み時間の災害想定したリアルな訓練計画、備蓄品の見直しなど緊急時の意識向上に向けた取組ができた。熱中症や感染症への予防についてもマニュアルに基づき迅速に対応を行ったことから、教職員（取組指標、成果指標）、保護者（満足度指数）ともにA+Bの合計が90％以上になり目標を達成できた。ただ、保護者については、Bの割合が高いことから、取組についての情報共有が必要である。	昨今の気象状況や災害状況などから、児童生徒の安全や健康を守るため、防災への取組や感染症や熱中症の予防と対応は重要である。引き続き、年間計画やマニュアルに基づき、安全や健康についての意識を高め、適切な行動を身に付けられるような取組を行う。学校での取組については、連絡アプリ等で情報発信し保護者とも共有できるようにする。また、防災や応急処置、救命救急等の研修を充実した内容で行っていきたい。
９ 生徒支援 (指導部) (地域支援部)	各学部体育大会や文化祭などの学校行事において、全ての児童生徒が活躍できるよう工夫する。	教職員の取組指標と成果指標、保護者の満足度指標のA+Bの合計が90％以上となり、目標を達成することができた。しかし、取組指標と成果指標においてC評価が、満足度指標においてC･D評価が見られた。特に、昨年度にはなかったD評価があったことについては、学校行事を行う上で、全ての子どもたちが活躍できる工夫を行っていたのか検討をする必要がある。	目標は達成されたものの、引き続き全ての子どもたちが活躍できる機会を作っていく。そのためには、子どもたちの得意を活かす役割分担を行うなどの役割の多様化や内容の柔軟化といった子どもたちが活動しやすい環境づくりに努めていきたい。
	児童生徒の状況や課題を学部内で共有し、研修で得た知識や情報を発信することで、よりよい支援につなげる。	教職員の取組指標、成果指標、保護者の満足度指標においてA+Bの合計が90％以上となり、目標を達することができた。児童生徒の状況把握や課題の共有についてはできていることが伺える。成果指標でＡは40％となっており、取組は行ったものの成果は十分ではなかったと感じた教員が多いといえる。満足度指標のＡも32％となっており、配信の情報が受取り手のニーズに合っていたかなどの検討が必要である。	支援会議の記録や回覧などを通して児童生徒の状況を把握し、課題の共有は引き続き丁寧に行っていく。次年度は教職員のニーズに合わせた研修など学びの機会を紹介し、特別支援教育の知識をアップデートする手助けができるとよい。配信の内容についてはより地域や福祉についてのアンテナを高くし、保護者や教職員から感想や意見などを聞く機会を持ちながら発信を続けていきたい。
１０ 進路支援 (進路指導部)	関係機関との連携を通して収集した進路情報を教職員間で共有し、進路説明会や懇談時などに積極的に保護者に提供する。	教職員に対しては、どの学部においても、進路に関する情報提供や共有がおおむね行えていたことが伺える。小学部、中学部の保護者が、自分のこどもの卒業後の進路や将来の生活に対する関心を高め理解を深められた、という実感が不十分だった。保護者に少しでも進路への意識を持ってもらいたいという思いで、全学年ではないが進路情報ファイルを配付したが、意識して利用してもらうための周知が不足していた。進路通信のアップデートに着手することができなかった。	進路情報ファイルの更なる周知を進めたい。進路情報ファイルの利用状況も含めて、各学部の保護者や教職員が必要としている情報や進路指導に関する要望をアンケート等で把握し、それに応じて情報提供を行ったり、研修会の内容に反映させたりする。今年度の外部講師を招いたセミナーへの反応が良かったので、来年度も積極的に外部講師を招き、保護者が知りたい情報、有用な情報を提供していきたい。
１１ 保護者との連携 (渉外部)	学校行事やPTA行事などで保護者の参加する機会を増やし、PTA活動の充実を図る。	取組指標および成果指標については、行事内容や運営方法の工夫が概ね評価され、A+Bの評価が9割を超えるなど、取組が一定の成果を上げることができた。一方、満足度指標では一部にC･D評価が見られ、取組の成果が必ずしも全ての保護者の満足につながっていない点が課題となった。今後保護者のニーズを正確に把握できていたのかを再度検討していく必要がある。	保護者の声を反映したPTA行事を実施している点を生かしつつ、今後はより多くの保護者が参加しやすくなるよう、行事の日程や時間帯、内容について工夫する必要がある。また、行事後のアンケートや意見を丁寧に整理し、PTA委員と共有しながら振り返りを行うことで、次年度のPTA活動への改善につなげていきたい。こうした取組を継続することで、保護者の参加機会を広げ、PTA活動への理解と満足度のさらなる向上を図っていく。